

Avadānakalpalatāにおける〈情〉について

山崎 一穂

1 はじめに

カシミールの詩人 Kṣemendra (西暦 990–1066 年頃) は詩論に関する書を二篇残している。すなわち *Kavikaṅṭhābharāṇa* と *Aucityavicāracarcā* である。前者は 55 詩節からなり、詩作を志す者が心得ておくべき諸般の知識を例示するものである。後者は 33 詩節とそれに対する散文の自註からなり、詩文学を構成する 27 の要素について〈適切性〉(aucitya) を詩人がどのように守るべきかを例証するものである。インド古典詩論では二つの事柄の間に成立する適合性のことを〈適切性〉と呼び、詩作品のありとあらゆる点で〈適切性〉が成立するように詩作をなすことが詩人に求められる。恋人と離れ離れになり悲嘆に暮れる女をきらびやかな装飾に身を包んだ人物として描くことなどは〈不適切性〉(anaucitya) の一例とみなされる¹。

Kṣemendra は *Aucityavicāracarcā* に 35 詩節を自作品から引用する。このうち、引用元の作品が現存するものは教訓詩 *Nītikalpataru* と仏教美文詩 *Avadānakalpalatā* (Av-klp) であり、それぞれ三詩節ずつ引用されている。Av-klp から *Aucityavicāracarcā* に引用された三詩節は第 24 章第 111 詩節と第 83 章第 34 詩節、第 64 章第 117 詩節に該当し²、それぞれ〈情〉(rasa) と〈真理〉(tattva)、〈名称〉(nāman) の〈適切性〉を例証する目的で引用されている。Kṣemendra はこれら三詩節に短い説明を与えているので、*Aucityavicāracarcā* とそれに対する自註は、Av-klp の原典の批判的校訂を目的とする諸研究者の関心を集めている。しかし問題の詩節を *Aucityavicāracarcā* で説かれる詩論に照らして検討する試みはなされていない。本論は、Av-klp 第 23 章第 105–112 詩節に焦点をあて、Kṣemendra が〈適切性〉の理論に従って〈情〉をどのように喚起させているかを明らかにするものである。

¹インド古典詩論における〈適切性〉の歴史については、RAGHAVAN [1942: 214–281] を見よ。〈適切性〉という概念が Bhāmaha や Daṇḍin に代表される初期の詩論家達に共有されていたことは彼等の詩論書から知ることができる。詩論の術語として用いられる〈適切性〉という語はカナウジの王 Yaśovarman (西暦八世紀頃) の戯曲作品 *Rāmābhyudaya* の序文に初めて現れる。*Rāmābhyudaya* は現存しないが、問題の序文は Bhoja (西暦 11 世紀) の詩論書 *Śṅgāraprakāśa* に引用されている。この序文で Yaśovarman は優れた戯曲作品がそなえているべき特徴として〈語の適切性〉と〈情の適切性〉とを挙げる。前者は作品の登場人物の性格や地位にふさわしい言葉を用いること、後者は適切な場面で〈情〉を喚起させることを考慮して登場人物を描くことである (RAGHAVAN [1942: 224–226])。詩論書で〈適切性〉に初めて言及する詩論家は Rudrata (西暦九世紀後半) である。彼は〈飾り〉(alaṅkāra) が詩作で重んじられるべきであるという立場に立ち、詩論書 *Kāvyaālaṅkāra* を書いているが、〈情〉と〈情の適切性〉が〈飾り〉の適用の是非を左右するという見解を示していることは注目に値する。彼は、同一の子音や音節群を反復する場合、〈適切性〉を考慮してなすべきであると述べ、詩的な〈欠陥〉(doṣa) とされるものも〈適切性〉に従って使用することで〈美質〉(guṇa) となりうると言う。詩作品で乱暴な言葉を用いることや文法的に正しくない言葉を用いること、劣った事物を優れた事物に喩えることは〈欠陥〉であるが、それぞれ、粗暴な人物が発する言葉を再現する場合や醜態している人物が発する言葉を再現する場合、人物を風刺する場合には〈美質〉とみなされることがその一例にあたる (RAGHAVAN [1942: 229–234])。

²Av-klp を構成する 108 章には、チベットに伝承されている Av-klp の原典 (以下、チベット伝本) にのみ存在する章と、ネパールに伝承されている Av-klp の原典 (ネパール伝本) にのみ存在する章とがある。以下、Av-klp の章番号については、チベット伝本にのみ存在する第 10 章 Garvāvākraṅti 「受胎」を算入せず、ネパール伝本にのみ存在する第 49 章 Śaddanta 「六牙象」を算入した番号を用いる。問題の二章の関係をめぐる諸議論については山崎 [2019] を参照せよ。

2 Av-klp 第24章第105–112詩節における〈情〉

2.1 第111詩節

本題に入る前に、インド古典演劇論における〈情〉について概観しよう。インド古典演劇論では、優れた作品を鑑賞した鑑賞者に生まれる美的な喜びを〈情〉と呼ぶ。詩論家達は八種類から十種類の〈情〉が存在することを認め、それらに対応して人間の心に恒常的に存在する感情として八種類から十種類の〈基本的感情〉(sthāyibhāva)を挙げる³。さらにこれらの感情を引き起こす条件と作中人物の心的状態を示す身体的変化、及びそれに付随してそれを高める一時的な感情としてそれぞれ、〈感情喚起条件〉(vibhāva)と〈身体表現〉(anubhāva)、〈付随的感情〉(vyabhicāribhāva)を挙げる。〈情〉がどのようにして生まれるか、また〈情〉が鑑賞者に生まれるのか、作品中の人物に生まれるのかをめぐり詩論家達は見解を異にする。Kṣemendraは九種類の〈情〉の存在を認め、鑑賞者の〈基本的感情〉が高められることで〈情〉が生まれると考えたようである。

以上を念頭に置き、まず Av-klp 第24章第111詩節の検討に入ろう。Av-klp 第24章 Abhiniṣkramaṇa「出家」は、シッダールタ太子の四門出遊と出家を描く章で、181詩節からなる⁴。うち、第105–112詩節はカピラヴァストウの都城の外に出たシッダールタ太子が火葬場の光景を目撃する場面の描写にあてられている。第111詩節の原文は次の通りである⁵。

Av-klp 24.111: kṣībasyevācalasya ^(a)drutahr̥tahṛdayā jambukī kaṅṭhasaktā

^(b)raktābhivyaktakāmā kam api nakhamukhollekham āsūtrayantī |

āsvādyāsvādya ^(c)yūnaḥ kṣaṇam adharadalaṃ dattadantavraṇāṅkaṃ

^(d)*lagnānaṅakriyāyām⁶ iyam ^(e)atirabhasotkarṣam āviṣkaroti ||

[111] ちょうど ^(b)色欲を抱き愛欲をあらわにした女が、酔った ^(d)若い男の ^(a)心をたちまち奪って、男の首を離さず、爪で顔面に何とも表現し難い引っ掻き傷を残し、歯の傷模様の特徴づけられる花瓣のような下唇を短い間に繰り返し味わっては、^(c)情交に夢中になって⁷、^(e)とても激しい欲を抱いている様子をはっきり見せるように⁸、^(b)血に欲をむき出しにしたこの

³インド古典演劇論において何種類の〈情〉が認められるかという点について詩論家達は見解を異にする。Bharataは〈恋〉(śṛṅgāra)、〈滑稽〉(hāsyā)、〈悲〉(karuṇa)、〈憤怒〉(raudra)、〈勇猛〉(vīra)、〈恐怖〉(bhayānaka)、〈嫌悪〉(bībhatsa)、〈驚異〉(adbhuta)という八種類を認める。Ānandavardhana(西暦九世紀)はこれらに〈寂靜〉(śānta)を加えた九種類を認める。Rudraṭaはこれらに〈愛〉(preyas)を加えた十種類を認める。

⁴同章を対象とした校訂・翻訳研究として岩井[2000]がある。ただし岩井[2000]が提示する原典と翻訳には古典詩論やパーニニ文法学の観点から判断し再考を要する箇所もあり、我々はこれを注意して参照する必要がある。

⁵以下、使用する写本の略号は山崎[2019]で用いたものに同じである。

⁶*lagnānaṅakriyāyām] Ex conj. Ed. confirmed by Aucitya; lagnā nagnakriyāyām DZ (DE JONG), Tib. has gcer bu'i bya ba dag la shin tu chags pa (*lagnā nagnakriyāyām).

⁷DE JONG [1996]は、デルゲ版とダライラマ五世版の梵文音写と Tib. に従い、当該箇所を lagnā nagnakriyāyām と訂正するよう提案する。この訂正案は再考を要する。それは次の二つの理由による。

- (1) nagnakriyā もしくはこれに類した nagnakṛti という複合語の用例は、管見の及ぶ限り、見出されない。この複合語が実際の言語運用で用いられていたか疑問である。
- (2) 〈掛詞〉の構造が踏まえていない。かりにこの読みを採用したとして、「裸の行為に夢中になった雌ジャッカル」とは何か。意味不明である。

以上の二点を踏まえるならば、Aucityavicāracarcā に引用された詩節と自註の読み支持される校訂本の読みをとるべきであろう。

⁸Kṣemendraは atirabhasotkarṣa という語を ratakauśalotkarṣa という語で言い換える。ここで用いられる rabhasa という語が表示する意味は「[肉]欲」(“carnal desires”)という意味であろう。この推定を支持する用例は Ratnākara(西暦九世紀)の美文叙事詩 Haraviṣaya 第27章第一詩節に見られる。

Haraviṣaya 27.1: atiratirabhasād alīkanidrā-

雌ジャッカルは、動かなくなっている (d) 死後間もない〔屍〕の (a) 心臓をたちまち抉り出して、〔屍〕首から離れず、爪で顔面に何とも表現し難い引っ掻き傷を残し、歯の傷模様の特徴づけられる花瓣のような下唇を短い間に繰り返して味わっては、(c) 四肢をばらばらにすることに夢中になって、(e) とても乱暴に引きずって行く行動をはっきり見せている。

以上の詩節に Kṣemendra が与える自註を見よう。原文は次の通りである。

Aucityavicāracarcā 132.20–133.3: atra śleṣopamayā tulyakakṣādhirūḍhayor api parasparaviruddhayor arthayor bībhatsaśṛṅgārāṅgāṅgibhāvayojanāyāṃ jambukī taruṇaśavasya kṣībasyeva niścalasthiteḥ sahasaiva hṛtahṛdayapadmā kṛṣṭacittā vā | kaṇṭhe lagnā śoṇite bhṛśam abhivyaktasprhā raktābhivyaktakāmā vā | nakhollekham āsūtrayantī dattadantavraṇam adharam āsvādyāsvādyāṅgachedakriyāyām anaṅgabhogakriyāyām vā lagnā | gātrāṇām ūrdhvagataṃ karṣaṇam ratakauśalotkarṣaṇam vā prakāśayatīti samānāyor bībhatsaśṛṅgārayoḥ kāmīnīpadaparitāyāgena kevalaṃ jambukyāḥ kartṛtvena bībhatsasyaiva prādhānye śṛṅgāre 'ṅgatām upagate vaktur bodhisattvasyāntargatagāḍhavairāgyavāsanādhivāsītacetasoḥ kutsārhajugupsayā nī-tambinīrativīḍambanam aucityaruciratām ādadhati | yady apy atra mahāvākye śāntasyaiva prādhānyam tathāpy udāharaṇaślokaḥvākya bībhatsasyaiva ||

ここでは「雌ジャッカルは、〔女の〕ように、ずっと動くことがない死んで間もない死体の蓮瓣のような心臓をじつにたちまち奪い取り、或いは酔った男の心を奪い、首から離れず、血に欲をひどくあらわにし、或いは色欲を抱いてひどく愛欲をあらわにし、爪の引っ掻き傷を残し、歯の傷模様をつけた唇を繰り返して味わった後で、四肢をばらばらにする行為に夢中になり、或いは情交を楽しむ行為に夢中になり、四肢を上方に引っ張る行為を、或いはとても性体験が豊かであることを示している」というように〈掛詞を用いた直喩〉を用いて並置されているけれども、互いに矛盾する二つの事柄が〈嫌悪〉と〈恋〉という主従関係と結びついている。この場合、単に「好色な女 (kāmīnī) という語を〔用いるのを〕避けて、雌ジャッカルを行為主体とすることで、等価になっている〈嫌悪〉と〈恋〉とのうち、〈嫌悪〉こそが主要なものであり、〈恋〉は従属的なものとなっているので、密かな強い離欲という無意識の思いで印象付けられた心をした菩薩という話者が抱く蔑みに値する諸事物に対する嫌悪感による、臀部豊かな女達と性愛を楽しむ行為に対して向けられた軽蔑が、適切性で魅力ある状態をもたらしている。この作品全体については、〈寂靜〉こそが主要なものであるけれども、例として提示された詩節の文については、〈嫌悪〉こそが主要なものである。

Kṣemendra によれば、問題の詩節には〈掛詞を用いた直喩〉(śliṣṭopamā) と呼ばれる〈意味の飾り〉(arthālaṃkāra) が用いられているという。つまり、「雌ジャッカル (jambukī) を詩節の言外に含まれた「女」に、「動かなくなった者」(acala) を「酔った男」(kṣība) に喩える〈直喩〉(upamā) だけでなく、詩節中の語 (a)–(e) が喩えるもの (upamāna) と喩えられるもの (upameya) 双方を限定できるように、語 (a)–(e) に二つの意味を与える〈掛詞〉も用いられているのである⁹。喩えるものと喩えられるもの、両者を限定する語の二つの意味の対応を表に示すならば、次の通りである。

rabhasavighūrṇitalocanāmbujābhiḥ |
śayaṇatalam aśīśriyan vadhūbhiḥ
saha madamanmathamantharā yuvānaḥ ||

酔いつぶれて情交することに気が進まない若い男達は、性愛を存分に楽しもうとするあまり狸寝入りしようとして蓮瓣のような眼をくるくるさせている女達と一緒に、寝台の上に横たわっていた。

注釈者 Alaka は rabhasa という語を rabhaso 'bhilāṣaḥ (「rabhasa とは欲求のことである」) と説明する。rabhasa という語が意味するのは、「欲求」特にここでは「性的な欲求」と考えて問題ないであろう。

⁹ 〈掛詞を用いた直喩〉の定義については山崎 [2017] を参照せよ。

	女	雌ジャッカル (jambukī)
(a) drutahr̥taḥḥḍayā	心をたちまち奪った	心臓をたちまち抉り出した
(b) raktābhivvyaktakāmā	色欲を抱き愛欲をあらわにした	血に欲をむき出しにした
(c) anaṅgakriyāyām	情交	四肢をばらばらにする行為
(d) yūnaḥ	若い	死後間もない
(e) atirabhasotkarṣam	とても激しい欲	とても乱暴に引きずっていく行動

さて、問題の詩節では、〈掛詞を用いた直喩〉で互いに異なる二つの事柄が提示され、〈恋〉と〈嫌悪〉という互いに矛盾する〈情〉が喚起されている。ここで注意すべきは、Kṣemendraが言う〈情〉の〈適切性〉とは、〈勇猛〉と〈憤怒〉、〈恐怖〉と〈嫌悪〉といった同種類の〈情〉が喚起されていなければならないということではなく、〈情〉の主従関係 (aṅgāṅgibhāva) が守られていなければならないということである。彼は自説の拠り所として Ānandavardhana の *Dhvanyāloka* 第三章第24詩節を提示する¹⁰。上掲詩節では〈恋〉と〈嫌悪〉という二種類の〈情〉が喚起されているから、Kṣemendraの理論に従えば、二つのうちいずれか一方が主要な〈情〉、もう一方が従属的な〈情〉でなければならない。問題の詩節では、〈直喩〉の喩えられるものに相当する「雌ジャッカル」に対応する喩えるものが「好色な女」(kāmīnī) という言葉で示されず、言外に含ませた表現になっている。このことによって〈嫌悪〉が主要な〈情〉であり、〈恋〉が従属的な〈情〉であることが理解されるから、二種類の〈情〉の主従関係が守られていると Kṣemendra は言う。これに対し、二種類の〈情〉の主従関係が守られていない例として、詩人 Amaru に帰せられる詩節を Kṣemendra は挙げる¹¹。原文を見よう。

Aucityavicāracarcā 133.26–134.2: gantavyaṃ yadī nāma niścitam aho gantāsi keyaṃ tvarā
dvitrāṇy eva padāni tiṣṭhatu bhavān paśyāmi yāvan mukham |
saṃsāre ghaṭikāpraṇālavigaladvārā same jīvite
ko jānāti punas tvayā saha mama syād vā na vā saṃgamaḥ ||

じつにもし、〔お前が〕 どうしても去らねばならないとすれば、ああ、お前は去ることだろう。どうしてこんなに急ぐのか。私が〔お前の〕顔を見ておく間、お前はじつに二、三步の間で、とどまってくれ。輪廻生存世界では、命は水瓶の〔水を受ける〕樋から滴る水と等しいのだから、お前と私が再会できようか、できまいかを、いったい誰が知るといえるのか。

以上の詩節に対し Kṣemendra は次のような説明を与える。

Aucityavicāracarcā 134.3–9: atra prakaraṇavartinaḥ śṛṅgārasasya paśyāmi yāvan mukham ity ut-
kañṭhotkañṭhāsamujjṛmbhamāṇasya svabhāvavirodhini śānte 'ṅgabhāvam upanīte vistṛṇatarānityatā-
varṇanayā vairāgyeṇa rater nyagbhāvam āpādayantyāpradhānarasasambandhenādhikam anaucityam
utsāhitam | niḥsārasaṃsārācārutāśravaṇena hi kaṭhinakriyākṛuracetāsām apy utsāhabhaṅgād aṅgāny
alāsībhavanti, kim uta kusumasukumāraśṛṅgārasakomalamanasām vilāsavatām | prānte ca śānta-
paripoṣanirvāheṇa rāgavairasyam eva paryavasyati |

ここでは「私が〔お前の〕顔を見ておく間」というように、しきりに求めることから生まれるものであり、かつ文脈にある〈恋〉という〈情〉と本質的に相容れない〈寂靜〉が従属

¹⁰*Dhvanyāloka* 3.24: virodhī vā virodhī vā raso 'ṅgini rasāntare | paripoṣaṃ na netavyas tena syād avirodhitā || (「或る主要な〈情〉がある時、〔その〈情〉〕と矛盾しているものであろうが、矛盾していないものであろうが、〔その〈情〉と異なる〕〈情〉を完熟させてはならない。〔そうすることで従属的な〈情〉が〕それ(主要な〈情〉)を阻害することはないであろう。」)

¹¹問題の詩節は現存する *Amaruśataka* には見られない。同じ詩節を Kṣemendra は *Kavikañṭhābharāṇa* 第二章第一詩節の例証にも引用している。

〔する〈情〉〕とされている。にもかかわらず、欲を離れることを理由として、性的快樂の蔑まれるべき性質を生み出す、無常性のかなり長い描写がなされているので、主要でない〈情〉と結びつくことによって〈不適切性〉がいつそう起こされている。じつに本質のない輪廻生存世界の不快さを耳にすれば、粗暴な行いで残忍な心をした者達が抱く強い意志ですら砕けてしまうので、彼等の四肢は萎えてしまう。まして花のように繊細であり、かつ〈恋〉という〈情〉で傷つきやすい心をした伊達な者達ならなおさらである。そして最終的に、〈寂靜〉を完熟させてしまうので、じつに色欲の味けなさがもたらされるであろう。

この詩節では〈恋〉と〈寂靜〉という互いに矛盾する二種類の〈情〉が喚起されており、文脈から考えて、前者が主要な〈情〉であり、後者が従属的な〈情〉である。ところが詩節c句で輪廻生存世界の無常性が長々と描かれることによって、従属的な〈情〉である〈寂靜〉が完熟し、二種類の〈情〉の主従関係が守られなくなっていると Kṣemendra は説明する。

2.2 第 106–110、112 詩節

第 111 詩節の前後の文脈を見ると、Kṣemendra は特定の語を言外に含ませることだけでなく、〈情〉の〈喚起条件〉や〈感情表現〉、〈付随的感情〉を表す語を用いることでも、この文脈で喚起されている主要な〈情〉が何であることを示していることがわかる。そこでまず、サンスクリット古典演劇論書で与えられる〈嫌悪〉の定義を見よう。演劇論家 Dhanamjaya (西暦 10 世紀後半) は Bharata の演劇論を体系化した演劇論書 *Daśarūpa* を著している。同書の第四章は〈情〉の定義にあてられている。Dhanamjaya は、Kṣemendra と異なり、〈寂靜〉を〈情〉の一つに数えない点に我々は注意しなければならないが、〈嫌悪〉を次のように定義する。

Daśarūpa 4.67: bībhatsaḥ kṛmipūṭigandhivamathuprāyair jugupsaikaḥbūr
udvegī rudhirāntrakīkasavasāmāmsādibhiḥ kṣobhanaḥ |
vairāgyāḥ jaghanastanādiṣu ghrṇāsuddho 'nubhāvair vṛto
nāsāvaktṛavikūṇanādibhir ihāvegārtiśaṅkādayaḥ ||

〈嫌悪〉は〈嫌悪感〉を〈基本的感情〉とし、〔三種類に分類される。すなわち、〕回虫や悪臭、吐き気を主要なものとする諸々〔の喚起条件〕により〔生まれる〕〈不信感をもたらす嫌悪〉¹²、血や腸、軟骨、脂、生肉を始めとする諸々〔の喚起条件〕により〔生まれる〕〈心を動揺させる嫌悪〉¹³、臀部や乳房を始めとするものに対する欲を離れた状態を原因として〔生まれる〕軽蔑で〈不浄を離れた嫌悪〉であり¹⁴、鼻や顔に皺を寄せる行為を始めとする諸々の〈感情表現〉に包まれている。これ(〈嫌悪〉)については、狼狽や苦痛、憂慮を始めとする諸々〔の〈付随的感情〉〕がある。

Dhanamjaya は〈嫌悪〉を三つの〈喚起条件〉にもとづき、〈不信感をもたらす嫌悪〉と〈心を動揺させる嫌悪〉、〈不浄を離れた嫌悪〉の三種類に分類する。以上の定義を考慮に入れて、第 106–110、120 詩節の原文を見ると、興味深い事実が浮かび上がる。

¹²Avaloka on *Daśarūpa* 4.67 (192.21–22): atyantāhr̥dyaiḥ kṛmipūṭigandhiprāyavibhāvair udbhūto jugupsāsthāyibhāvaparipoṣaṇalakṣaṇa udvegī bībhatsaḥ | (「回虫や悪臭を主要なものとする諸々のとても不快な喚起条件によって生まれ、嫌悪感という〈基本的感情〉が〔それ(〈嫌悪〉)を〕育む働きをなすことに特徴づけられるのが〈不信感をもたらす嫌悪〉である。」)

¹³Avaloka on *Daśarūpa* 4.67 (193.5–6): rudhirāntravasākīkasamāmsādībhāvāḥ kṣobhanaḥ bībhatsaḥ | (「血や腸、脂、軟骨、肉を始めとするものを喚起条件とするのが、〈心を動揺させる嫌悪〉である。」)

¹⁴Avaloka on *Daśarūpa* 4.67 (193.11–12): rāmyeṣv api ramaṇīyajaghanastanādiṣu vairāgyād ghrṇāsuddho bībhatsaḥ | (「魅力的な臀部や乳房を始めとする諸々のものは、楽しみの対象となされるべきであるけれども、それらに対する欲を離れた状態を原因として、軽蔑で〈不浄を離れた嫌悪〉が生まれる。」)

Av-klp 24.106: sa dr̥ṣṭvā kuṇapākīrṇam aśivaṃ śivakānanam |
sodvegaḥ¹⁵ sārathim prāha sthagitasyandanah¹⁶ kṣaṇam ||

[106] 屍が散らばる、シヴァの〔修行する〕不吉な森を見て、たちまち全身に冷や汗が流れ出た彼は¹⁷、不信感を抱き、御者に言った。

Av-klp 24.107: sārathe paśya jantūnām kāyāpāyamayim¹⁹ daśām |
dr̥ṣṭvedam api rāgārdrām mano mohapramādinām ||

[107] 「御者よ、見よ。身体に降りかかる諸々の不幸に満ちた人々の境遇を。およそ迷妄で正気を失った者というのは、それを見てもなお、このような色欲にまみれた心を抱くのだ。」

Av-klp 24.108: parastrīdarśanātrptam²⁰ netram āsvādya sādaram |
asyāsatyavatī jihvā paśya kākena kṛṣyate ||

[108] 「見よ、飽くことなく他人の妻達を熱心に覗いていた彼の眼を食べてから、鳥は彼の〔他者を〕欺いてきた舌を引き裂いているのだ。」

Av-klp 24.109: asyāḥ stanamukhanyastanakhollekhasukhasthitih |
khaṇḍayatya adharam ḡḍhraḥ kāmīva madanirbharah ||

[109] 「ちょうど情欲でいっぱい伊達男が、乳房や顔に爪跡をつけては、快樂を継続して

¹⁵sodvegaḥ] DZ confirmed by Tib. *chags bral can*; sodvegaṃ Ex conj. Ed.

¹⁶syandanah] Ex conj. Ed.; °syandanam D; °syandana Z.

¹⁷該当箇所デルゲ版梵文音写とダライラマ五世版梵文音写の読みはそれぞれ、sthagitasyandanamとsthagitasyandanaである。校訂本はこれをsthagitasyandanahと修正する。sthagitasyandanahという複合語の用例はBhāratamañjarī第三章第574詩節の用例に支持されるから、校訂本が推定する読みをとるべきである。次にこの複合語をどのように解釈するかが問題となる。対応するTib.はshing rta ni bzung nas「馬車を停めて」であり、この場合「シッダールタ太子が馬車を停めた」ことになる。Bhāratamañjarī第三章第574詩節の原文は次の通りである。

Bhāratamañjarī 3.574: pratyakṣavigrahaṃ dr̥ṣṭvā taṃ kopākulito nalah |
śaptum aicchat sa saṃrambhaḥ (Read: *sasaṃrambhaḥ*) sthagitasyandanah¹⁶ kṣapām (Read: *kṣaṇam*) ||

目の前に姿を現した彼(カリ)を見て、ナラは怒りでいっぱいになり、一瞬の間に全身に汗が流れ出し、猛烈な怒りを抱いて、彼に呪いをかけようとした。

次の二つの理由から考えて、詩節d句のsthagitasyandanahという語を「馬車を停めた者」とは解釈できない。まず、この文脈では、ダマヤンティーの二度目の婿選式に向かうリトゥパルナ王が車上からヴィビータカ樹の葉の数を瞬時に数え上げ、御者バーフカ(ナラ)に馬車を止めさせ葉の数を数えさせたことが物語られる。この詩節に先行する第571詩節にadarśayad bāhukasya yathoktam patrasaṃcayam(「[リトゥパルナ王は]バーフカに一群の葉〔の数〕が言った通りであることを示した。」)という一文があることから考えても、馬車が停まっていることが理解される。次に上掲詩節では、バーフカが怒りを抱いたことが物語られている。したがって〈憤怒〉という〈情〉が喚起されている可能性が考えられる。DhanamjayaがDaśarūpa第四章第68詩節で「汗(sveda)を〈憤怒〉の〈身体表現〉の一つに挙げていることは注目されてよい。

Daśarūpa 4.68: krodho matsaravairivaikṛtamayaḥ poṣo 'sya raudro 'nujah
kṣobhaḥ svādharamśakampabhrukūṭisvedāsyarāgair yutaḥ |
śastrollāsavikatthanāmsadharanīghātapatijñāgrahair
atrāmarśamadau smṛtiś capalatāsūyagryavegādayaḥ |

妬みや敵対者に対する憎悪からなる諸々〔の感情喚起条件〕によって〈憤り〉〔という〈基本的感情〉が喚起される〕。これが結果として高められたものが〈憤怒〉である。〔その〈身体表現〉は〕自分の唇を噛む行為や身震いする行為¹⁸、眉をひそめる行為、汗〔を流す行為〕、顔を赤くする行為、武器が現れること、誇らしげに肩〔を怒らせる行為〕、地面を引っ掻く行為、宣誓、固執を伴う興奮である。これ(〈憤怒〉)に関しては憤慨や傲慢、想起、移り気、羨望、残忍、衝動を始めとする〔付随的感情〕がある〕。

以上の二点から考えて、sthagitasyandanaという複合語を「汗が流れ出た者」と我々は解釈すべきである。

¹⁹apāyamayim] DZ confirmed by Tib. *gnod pa'i rang bzhin* (DE JONG); °apāyamaṭim Ex conj. Ed.

²⁰darśanātrptam] DZ confirmed by Tib. *bltas ma ngoms* (DE JONG); °darśanāt trptam Ex conj. Ed.

得て²¹、唇の形を損なわせるように、〔血に〕すっかり酩酊した鷺は彼女の乳房や顔に爪跡をつけ、快楽を継続して得ては、彼女の唇の形を損なわせている。」

Av-klp 24.110: ete *hr̥ṣṭaniṣaktavāyasaśakr̥niṣṭhīvinah²² pādapā
mūrccantīva vipākapūyakunāpāghrāṇena niṣkūṇitāḥ |
dr̥ṣṭvā ḡdhravidāryamāṇam asakrt̥ *kīr̥ṇāntratantram²³ śavam
vaktram²⁴ vātavilolapallavakarair ācchādayantīva ca ||

[110] 「歓喜して〔枝に〕とまった鳥達の排泄物を垂らしているこれら木々は²⁵、腐敗が進んだ膿を流す屍の匂いを嗅いだために、あたかもすっかり縮みあがって失神しているように見え²⁶、そしてまた、繰り返し鷺達に引きちぎられて、一連なりの腸が飛散している屍を見

²¹岩井 [2000: 160] は °ullekhaḥ sukhashthitīḥ と原典を訂正する。これは写本学的、文法的に考えて不必要な処置である。まずデルゲ版とダライラマ五世版の梵文音写も、対応する Tib. sen dmugs dgod cing bde bar gnas も岩井 [2000: 160] の訂正案を支持しない。文法的にはどうか。この複合語は nyastā nakhollekhā yena saḥ と sukhasya sthito yasya saḥ と分析される二つの所有複合語からなる同格限定複合語として、nyastanakhollekhaś cāsau sukhashthitāś ca と分析できる。したがって原典を訂正する必要はない。

²²*hr̥ṣṭa°] Ex conj.; dr̥ṣṭa° DZ, Tib. has g.yo ba'i.

²³*kīr̥ṇāntratantram] Ex conj.; kīr̥ṇādratantram DZ; kīr̥ṇādratantram Ex conj. Ed.

²⁴vaktram] DZ confirmed by Tib. bzhin ras (DE JONG); bhūyo Ex conj. Ed.

²⁵デルゲ版とダライラマ五世版梵文音写が伝えるこの複合語の冒頭部の読みは dr̥ṣṭa° 「見られた」であり、これに対応する Tib. は g.yo ba'i 「動いている」である。校訂本は dr̥ṣṭa° という読みをとる。しかしこれでは意味が通じない。ところが、Tib. からも、字形から推定され、かつ韻律に合う読みを復元することは難しい。梵文音写の読みに近い韻律に合う読みとしては hr̥ṣṭa° という読みが考えられる。用例についてはどうか。hr̥ṣṭavāyasa 「歓喜した鳥」という複合語に類似した suprahṣṭavihaṃgama 「大いに歓喜した鳥達がいる〔森〕」という複合語は Mahābhārata 第一巻第 64 章第 15 詩節に見られる。Mahābhārata 1.64.15: prekṣamāṇo vanam tat tu suprahṣṭavihaṃgamam | āsramapravaram ramyaṃ dadarśa ca manoramam || (「他方、〔ドゥフシャンタ王は〕大いに歓喜した鳥達がいるその森を見ているうちに、魅力的であり、楽しまれてしかるべき素晴らしい庵を目にした。)。ただし、文字 d と文字 h との混同が起こる可能性は、チベット文字の楷書体 (dbu can) でも、草書体 (dbu med) でも、低いことが問題として残る。岩井 [2000: 262] は dhr̥ṣṭa° という読みを推定する。しかし dhr̥ṣṭaniṣakta° 「ずうずうしく〔枝に〕とまった」という複合語もしくはそれに類した複合語の用例は挙げられていない。

この複合語の末尾に現れる niṣṭhīvin という語の用例は、管見の及ぶ限り、見出されない。しかし niṣṭhīvin という語の後に taddhita 接辞 taL が起こった niṣṭhīvitā という語は、SCHMIDT, Nachtr に、Haravijaya 第 10 章第 13 詩節を典拠として、収録されている。出典元の原文は次の通りである。

Haravijaya 10.13: vākyam vacasvijanadurvacam ittham etad
adyāmalam tvadaparaḥ ka ivābhīdadhīyāt |
syāt kaścīd eva sa mañir nanu śātakumbha-
niṣṭhīvitā jagati yasya gatā prasūtim ||

雄弁な者ですら発し難く、汚れないこのような言葉を、爾を除いて、いったい誰が今、このように発することができようか。黄金を吐き出す性質が現れた宝珠として〔スヤマンタカと呼ばれる宝珠以外に〕いかなるものもがいったいこの世にありえようか。

Alaka 註は詩節中の niṣṭhīvin という語に対して śātakumbham vamaṭi yo mañiḥ sa (「黄金を吐き出す宝珠」) という語釈を与えている。

²⁶niṣkūṇita という語は kośa 類にも、辞書にも採録されていないが、「卓越性」(viśeṣa) もしくは「完全性」(sākalya) を標示する (Cf. PW, s.v., nis) upasarga である nis に先行された動詞語根 kūṇ 「収縮させる („zusammenziehen“)」に krt 接辞 Kta が導入された語形であるから、「完全に萎縮させられた」という意味を導き出すことは理論上可能であろう。実際の用例についてはどうか。niṣkūṇita という語の用例は Av-klp 第二章 Śrīsenā 第 74 詩節に見られる。原文は次の通りである。

Av-klp 2.74: tam dr̥ṣṭvā vaiśasāveśaviṣamakleśavīhvalam |
niṣkūṇitānavano jano 'bhūn mīlīteṣaṇaḥ ||

彼(バラモン)が負傷して激しい苦痛に苛まれているのを見て、人々は口を開くことすらできず、眼を閉ざしてしまった。

niṣkūṇitānavana という語に対する Tib. は bzhin gyi tshogs rnams ni sgra med 「口の集まりは声をなくした」である。ROTHENBERG [1990: 168] はこの複合語を “a group with closed mouths” と解釈する。

て²⁷、あたかも、風で揺れる新芽という手で顔を覆っているかのように見える。」

Av-klp 24.112: ity uktvā jātaviratir bhavabībhatsakutsayā |
kalayan kleśanirvāṇaṃ praviveśa purāntaram ||

[112] [シッダールタ太子は、性的快樂に対する] 関心がさめてしまったので²⁸、輪廻生存世界に対する嫌悪を理由とする軽蔑を込めて、このように語り、煩惱の苦しみが完全に消えてなくなることを考えながら、都城の中へ入った。

第 106 詩節と第 110 詩節、第 112 詩節 a 句、第 112 詩節 b 句にそれぞれ、「不信感」(udvega) と「腐敗が進んだ膿を流す屍の匂いを嗅ぐ行為」(vipākāpūyakuṇapāghrāṇa)、「関心の消失」(virati)、「輪廻生存世界に対する嫌悪を理由とする軽蔑」(bhavabībhatsakutsā) という語が見られる。以上を Dhanamjaya の定義に照らして考えると、第 106–112 詩節では、悪臭という喚起条件を理由として生まれる〈不信感をもたらす嫌悪〉と関心の消失を理由とする軽蔑を喚起条件とする〈不浄を離れた嫌悪〉という二種類の〈嫌悪〉が喚起されていると言える。

さらに原文を吟味すると、Kṣemendra は語で〈嫌悪〉を直接的に喚起させているだけではないことがわかる。第 109 詩節を見よう。詩節 ab 句には stanamukhanyastanakhollekhasukhasthitiḥ 「乳房や顔に爪の跡をつけ、快樂を継続して得る者」という七語から構成される複合語が用いられている。Dhanamjaya は〈不信感をもたらす嫌悪〉と〈心を動揺させる嫌悪〉を例証する目的で、戯曲詩人 Bhavabhūti (西暦八世紀) の作品からそれぞれ、餓鬼が描かれる *Mālatīmādhava* 第五幕第 16 詩節とラクシャサ女が描かれる *Mahāvīracarita* 第一幕第 35 詩節とを引用する²⁹。両者のうち、

²⁷ 該当箇所デルゲ版とドライラマ五世版の読みは *kārnādratantram* (Read: *kīrṇādratantram*) 「湿った糸が飛散した」であるが、これでは意味が通じない。これに対応する Tib. は *rlan ldan rgyu ma gzags pa'i* 「湿った腸が滴る」であり、**dravadārdrāntram* という読みが想定されるが、韻律上不可能であり、*ārdratantra* という複合語の用例は、管見の及ぶ限り、見出されない。韻律上可能であり、かつ用例に裏付けられる読みとしては、**kīrṇāntratantram* という読みが考えられる。*antratatra* という複合語の用例は、*Aucityavicāracarcā* 第 16 詩節に対する Kṣemendra の自註 (129.20–22) の他、Rājasekhara (西暦 9–10 世紀頃) の戯曲作品 *Bālarāmāyaṇa* 第二幕第七詩節に用例がある。後者の原文は次の通りである。

Bālarāmāyaṇa 2.7: *srastāntratantraturagāṇi krpāṇaghāta-
ghūrṇatkarṇīy anaṇupūtanaphūtkṛtāni |
dhāvatkabandhakaṭutāṇḍavaḍāmarāṇi
draṣṭuṃ raṇāny aharahas trijagad bhramāmi ||*

一続きの腸が垂れ下がった馬達があり、象達が剣の一撃で気を失い、大勢の屍鬼達が声を上げ、首が落ちた走り回る胴体が舞う激しい踊りで見ると驚かせる諸々の戦場を見るために、来る日も来る日も、私は三界を歩き回ろう。

以上を根拠に **kīrṇāntratantram* という読みをとる。ただしこの場合、文字 *ntra* と文字 *rdra* とがシャーラダー文字でも (字母については GRIERSON [1916] を見よ)、楷書体・草書体チベット文字でも誤写される可能性が低いこと、Tib. の解釈から離れてしまうことが問題として残る。

²⁸ *virati* という語は一般的に「停止行為」(„Aufhören“) という意味で用いられる。しかし文脈から判断して、*virati* という語がこの意味で用いられているとは考えられない。対応する Tib. も *dga' dang bral ba skyes* 「喜びを失って」である。*jātavirati* という表現に類似した *viratiṃ janayati* という表現は Av-klp 第 10 章 *Sundarīnanda* 第 81 詩節に見られる。原文は次の通りである。

Av-klp 10.81: *jaghanyā janayaty eva na kasya viratiṃ ratiḥ |
yasyāṃ bhavati *paryante śvāpi nāma () Ex conj. DE JONG; śāpi nāma DZ.) parānmukhaḥ ||*

胸が悪くなるような性的快樂が、誰の関心をじつにさましてしまわないことがあるか。〔楽しみが〕終わってしまえば、じつに犬すらも性的快樂に関心を失ってしまうのだから。

b 句の *virati* という語を「停止行為」という意味で解釈すると、ab 句は「胸が悪くなるような性的快樂が誰の停止を生ぜしめないことがあるか」という意味不明の一文になってしまう。これに対応する Tib. も *su yi yid 'byung skyed mi bskyed* 「いかなる者の落胆の生起を生まないことがあるか」であり、*virati* という語を「停止行為」という意味には解釈していないことがわかる。以上の用例を根拠に、*virati* という語を「関心を失う行為」という意味に解釈する。

²⁹ *Mālatīmādhava* 第五幕第 16 詩節については山崎 [2016] を参照せよ。*Mahāvīracarita* 第一幕第

後者は詩脚を跨ぐ 13 語から構成される複合語が使用される詩節であることは注目されてよい。長い複合語を用いて〈嫌悪〉を間接的に喚起させている用例はこの他に Kṣemīśvara (西暦 9–10 世紀頃) の戯曲作品 *Caṇḍakauśika* 第四幕第八詩節に見られる³⁰。以上を踏まえると、Kṣemendra は第 106–112 詩節で、語を用いて直接的にも、文体 (rīti) を用いて間接的にも³¹、鑑賞者に〈嫌悪〉を喚起させていると考えられよう。

しかし次の点も無視できない。すなわち、第 106 詩節 d 句と第 110 詩節 b 句にそれぞれ、「汗」(syandana) と「気絶している」(mūrchantī) という〈感情表現〉を表す語が、第 109 詩節 c 句と第 110 詩節 a 句にそれぞれ、恐ろしい生物である「鷲」(gr̥dhra) と「鳥」(vāyasa) という〈感情喚起条件〉を表す語が用いられていることである。Dhanamjaya がこれらの語で示される事物を〈嫌悪〉の〈感情表現〉と〈感情喚起条件〉を表すものに挙げていないことには注意を要する。彼によれば、「汗」と「気絶」、恐ろしい生物はそれぞれ、〈恐怖〉の〈感情表現〉、〈感情喚起条件〉を表すものとされる³²。〈恐怖〉と〈嫌悪〉はしばしば同時に喚起される〈情〉である。例えば、上述の *Caṇḍakauśika* の第四幕第八詩節では前半 ab 句と後半 cd 句とでそれぞれ、〈恐怖〉と〈嫌悪〉とが喚起されている³³。ここで問題となるのが、両者の主従関係である。*Aucityavicāracarcā* で Kṣemendra が与える説明によれば、第 111 詩節では〈嫌悪〉と〈恋〉のうち、〈嫌悪〉が主要な〈情〉であることがわかるが、〈恐怖〉と〈嫌悪〉のうちでは、いずれが主要な〈情〉であるか。これを考える上で、第 112 詩節 b 句で「輪廻生存世界に対する嫌悪を理由とする軽蔑」(bhavabībhatsakutsā) という語が用いられていることは注目されてよい。Kṣemendra は「嫌悪」(bībhatsa) という語を用いることで、火葬場の光景を目にしたシッダールタ太子の不信感、性的快楽への関心消失、輪廻生存世界の嫌悪という心境の変化を描くだけでなく、〈嫌悪〉と〈恐怖〉のうち、前者が主要な〈情〉であり、後者が従属的な〈情〉であることを、鑑賞者に明確に理解させていると言えよう。

3 〈情〉と〈飾り〉

最後に〈情〉と〈飾り〉との関係を見たい。Av-klp 第 24 章第 106–112 詩節に見られる〈飾り〉の特徴を検討すると、Kṣemendra が詩人は詩作で〈飾り〉をどのように用いるべきであると考えて

35 詩節の原文は次の通りである。*Mahāvīracarita* 1.35: āntraprotabṛhatkapālanalakakūrakvaṇatkañkaṇa-prāyaprenkhitabhūribhūṣaṇaravair āghoṣayanty ambaram | pītoccharditaraktakardamaghanaprāgbhāraghollaladvyāloṣṭanabhārabhairavavapur darpoddhatam dhāvati || (「彼女(タータカー)は、内臓とつなぎ合わせられた大きな頭蓋骨と脛骨という、ぞっとする音を立てる腕輪を主なものとする揺れるたくさんの装身具が立てる音を虚空いっぱいこぼれながら、飲み込まれたのに、[量が多過ぎて]吐き出された血糊の厚い堆積物で恐ろしい、はね上がった揺れる豊かな両乳房で恐怖を掻き立てる姿をとって、驕りで慢心しながら、走って行く。」)

³⁰SATHAYE [2010: 366] を見よ。同詩節では tāpasphuṭitanṛkarotīpuṭadarīlanamastiṣkāktā 「熱で割れた人間の頭蓋骨の穴や割れ目から現れ出ている脳に触れた [炎の舌]」という、九語からなる複合語が使用されている。

³¹古典詩論家達は二種類から四種類の文体が存在することを認める。しかし彼等が与える文体の定義の基準は曖昧である。Rudraṭa は *Kāvyaḷamkāra* で複合語を構成する語の数を基準に文体を定義し(第二章第五詩節)、詩人がどの文体を用いてどの〈情〉を喚起させるべきか述べる。*Kāvyaḷamkāra* 15.20: vaidarbhipāncālyau preyasi karuṇe bhayānakādbhutayoḥ | lāṭīyāgaudīye raudre kuryād yathaucityam || (「〈愛〉と〈悲〉、〈恐怖〉、〈驚異〉についてはヴァイダルビー体またはパンチャーリー体を、〈憤怒〉についてはラーティー体またはガウディー体を、適切な形で [〈情〉そのものを完熟させる形で]、用いるべきである。」。彼によれば、〈憤怒〉を喚起させる場合、五語以上からなる複合語を含むラーティー体またはガウディー体を用いるべきであるとされるが、これは当時のカシミールの文壇の風潮を考慮したことによると思われる。例えば、Kṣemendra は韻律論書 *Suvṛttatīlaka* 第三章第 19 詩節の例証に *Haravijaya* 第一章第一詩節を引用し、〈勇猛〉と〈憤怒〉が同時に喚起されている詩節であると説明するが、この詩節には Rudraṭa が定義するガウディー体を用いられていることに注意すべきである。

³²Dhanamjaya による〈恐怖〉の定義については、HAAS [1912: 145] 及び山崎 [2019: 65–66] を見よ。

³³SATHAYE [2010: 366] を見よ。

いたかが明らかになる。

第 111 詩節の〈掛詞〉に注目しよう。この〈掛詞〉の構造を検討すると、二点の特徴を指摘できる。第一点目は、複合語 (b) raktābhivyaktakāmā を除き、複合語 (a) drutahr̥tahr̥dayā と (c) anaṅgkriyāyām、(e) atirabhasotkarṣam が、喩えるものに相当する「女」を限定する場合にも、喩えられるものに相当する「雌ジャッカル」を限定する場合にも、同じ分析文 (vighrahavākya) の形をとることである。複合語 (b) のみが、喩えるものを限定する場合、raktā cāsāv abhivyaktakāmā ca 「色欲を抱き愛欲をあらわにした」という同格限定複合語に、喩えられるものを限定する場合、rakte abhivyaktakāmā 「血に欲をむき出しにした」という処格限定複合語に解釈されねばならないが、複合語を構成する語はすべて同一である。第二点目は (a)–(e) 以外の語に二つの意味が与えられていないことである。これらの特徴を踏まえるに、Kṣemendra が用いる〈掛詞〉は、複雑な構造をとらず³⁴、二つの意味を表示させるために不自然かつわざとらしい表現に依拠せず、世間的な言語運用の枠内で組み立てられていると言える³⁵。

次に注目すべきは、〈音の飾り〉(śabdālaṅkāra) の一つである〈同一子音の反復〉(anuprāsa) である。これが顕著なのが、第 108 詩節 d 句と第 109 詩節 ab 句である。前者では paśya kākēna kṛṣyate という形で、後者では stanamukhanyastanakhollekhasukhasthiṭṭhī という形で、それぞれ無声軟口蓋子音/k/と/kh/の反復が起こっている。Kṣemendra は第 109 詩節 d 句で、kāmīva madanirbharah というように、唇子音系列の鼻音/m/と歯子音系列の鼻音/n/、半母音/v/という柔らかい音を使用してい

³⁴ 〈掛詞〉は〈語の掛詞〉(śabdaśleṣa) と〈意味の掛詞〉(arthaśleṣa) とに分類される。前者は同一語で複数の意味が理解されるもの、後者は語を分割すること (padabhaṅga) で複数の意味が理解されるものである。時代が降り、宮廷詩人達の間で競争が激しくなるにつれ、彼等は前者を好んで使用している。一例として、詩人 Māgha (西暦 7–8 世紀頃) の美文叙事詩 Śīsupālavadhā 第 16 章第 11 詩節を見よう。

Śīsupālavadhā 16.11: sakalāpīhitasvapauruṣo niyatavyāpad avarḍhitodayaḥ |
ripur unnatadhīracetasāḥ satatavyādhīr anītir astu te ||

誇り高く落ち着きある心をした爾 (ヴィシユヌ) に敵対する者が、自身の武勇がすっかり消え去り、繁栄が衰え、ひどい不幸にいつも見舞われ、絶え間なく病を患い、万策尽きた者となりますように。

愚かな爾に敵対する誇り高い精神をした者 (シシュパーラ) が、自身の武勇をはっきりと顕し、不幸に片時も見舞われることなく、繁栄が途切れることがなく、いつも憂いを抱くことがなく、天災に見舞われることがない者となりますように。

この詩節では、ripur 「敵」と astu 「彼はあれ」、te 「爾」という語を除くすべての語を異なる形に分割することで、二つの意味が理解される。一例を挙げれば、c 句の unnatadhīracetasāḥ という複合語は、ヴィシユヌを賞讃する言葉としては、「誇り高く、落ち着きのある心を有する者」(unnatam dhīram cetō yasya) と解釈できる。これに対しシシュパーラを賞讃し、ヴィシユヌを誹謗する言葉としては、unnatadhīr acetasaḥ と語を分割することで、「誇り高い精神をした者」(unnatā dhīr yasya)、「愚かな者」(na vidyate cetō yasya) と解釈できる。なお〈掛詞〉によって賞讃の意味と誹謗の意味とが理解される詩節は同作品の第 15 章にも 35 詩節見られる。ところが問題の 35 詩節は Mallinātha 註 (西暦 14 世紀) が伝える原典がなく、Vallabhadeva 註 (西暦 10 世紀頃) が伝える原典に存在する (挿入箇所は Mallinātha 註が伝える原典の第 38 詩節と第 39 詩節の間に該当する)。BRONNER and MCCREA [2012] は問題箇所〈掛詞〉を第 16 章のそれと文体や語彙などの点から比較し、〈掛詞〉が用いられた第 15 章の 35 詩節は Māgha の真作ではないと結論づける。

³⁵ 宮廷詩人達が言葉の遊戯に耽り、自身の詩節に〈欠陥〉を生んでいる例をしばしば見ることができる。Haravijaya 第五章第 60 詩節はその典型的な例と言えよう。

Haravijaya 5.60: śimhaḥ karāhatibhir atra na dantinām sma
helālasābhir apinaḍ balato 'dhipaṁ kam |
nottīryate mahisamhatibhir divāpi
he lālasābhir api naḍvalato 'dhipaṅkam ||

ここでは獅子が、どんな象達のリーダーを、ふざけて与える手の一撃で荒っぽく傷つけなかったことがあろうか。〔シヴァ〕よ、水牛の群れは沼地を好むけれど、昼間には、葦の茂みから姿を現すことがなかった。

この詩節では ab 句と cd 句がそれぞれ一文をなす。a 句末の sma という語は、cd 句を構成する文中になければならない。したがって〈乱れた語順〉(bhinnakrama) という〈欠陥〉を生んでいることになる。

る³⁶。これによって猛禽が硬い爪や嘴で柔らかい肉を引き裂き啄む光景を鑑賞者は連想できる。爪の音を表現する目的で無声軟口蓋子音/k/を反復する〈同一子音の反復〉は Kṣemendra の先達である宮廷詩人達の諸作品に用例がある³⁷。したがって彼がそれを踏襲していることがわかる。この〈同一子音の反復〉の用例についても、我々は先に挙げた〈掛詞〉の特徴と同様の特徴を指摘できる。すなわち、同一子音を反復する目的で、重複する表現や必要以上の擬音語を用いていることも³⁸、世間的な言語運用から外れた表現を用いていることもないということである。以上の点からは、YAMASAKI [forthcoming] で指摘した通り、〈飾り〉は〈情〉に従属的なものであり、詩人は〈飾り〉を〈情〉を喚起させる補助手段として用いるべきであるという見解を Kṣemendra がとっていたことを示唆しよう。

4 結論

以上から得られた事実は次のように要約できよう。

- Kṣemendra は、*Aucityavicāracarcā* で、従属的な〈情〉を主要な〈情〉よりも完熟させてはならないという条件のもとで、詩人が複数の〈情〉を混ぜ合わせることを認めている。
- 〈情〉の〈適切性〉の例として *Aucityavicāracarcā* に引用された Av-klp 第 24 章第 111 詩節で、Kṣemendra は雌ジャッカルと屍とをそれぞれ、女と彼女の愛人とに喩える〈直喩〉を用いて、〈嫌悪〉と〈恋〉という互いに矛盾する二つの〈情〉を喚起させている。Kṣemendra によれば、前者が主要な〈情〉であり、後者がそれに従属的な〈情〉である。このことは、〈直喩〉における喩えるものが「好色な女」(kāminī) という語を用いて明示されていないことから理解される。
- Av-klp 第 24 章第 105–110、112 詩節には「不信感」(udvega) と「汗」(syandana)、「腐敗が進んだ膿を流す屍の匂いを嗅ぐ行為」(vipākapūyakuṇapāghrāṇa)、「気絶している」(mūrchat)、「関心の消失」(virati)、「鷲」(grdhra)、「鳥」(vāyasa) という語が見られる。このことは Kṣemendra が〈嫌悪〉と〈恐怖〉という二つの〈情〉を混ぜ合わせている可能性を示す。
- Av-klp 第 24 章第 112 詩節の原文を吟味すると、Kṣemendra は、主要な〈情〉が〈嫌悪〉であることを鑑賞者に理解させるために、「輪廻生存世界に対する嫌悪を理由とする軽蔑」(bhaya-bībhatsakutsā) という語を用いていることがわかる。
- Kṣemendra が第 111 詩節で用いる〈掛詞〉は、「〈飾り〉こそが詩文学の命である」と主張する詩論家達が定める詩論の規則に従って組み立てられてはいない。〈掛詞〉の構造を検討すると、Kṣemendra は、「詩人は〈情〉を詩作品の本質とみなすべきである」という見解をとっていたことが明らかになる。

以上から、Kṣemendra は、Av-klp 第 24 章第 105–112 詩節で、〈嫌悪〉という〈情〉だけでなく、〈恋〉や〈恐怖〉という〈情〉も喚起させており、これらのうち〈嫌悪〉が主要な〈情〉であることを、直接的もしくは間接的な表現を用いて、鑑賞者に理解させるように留意していると言えよう。

³⁶ LIENHARD [1980–1981: 173–174] を見よ。

³⁷ 一例を *Haravijaya* 第 47 章第 162 詩節に見ることができる。*Haravijaya* 47.162: tvatsaṃśrayān girinadīkuharāntarālavṛtīḥ suraṅjitamukho na hinasti nūnam | uddāmadānajakūṅjarakumbhakūṭākakoṭīkarajakrakaco `pi siṃhaḥ || (「山々や川、洞穴の中で活動する、顔を真っ赤にした獅子は、イコル液がとめどなく流れる象のこめかみの突起をよく引き裂くことができる鋸のような爪を生やしているけれども、爾(チャンディー)のもとに身を寄せる者達をきつと害すことはないだろう。」)

³⁸ 擬音語の使用は〈欠陥〉ではないが、詩論家を含め、多くの詩人が同一子音を少しでも多く反復するために、kolāhala 「ブンブンという音」、śiñjāna 「ジャラジャラという音」、gulugulā 「ゴーゴーという音」といった擬音語を用いている例は多数見られる。YAMASAKI [forthcoming] を見よ。

ここで以上の考察結果が示唆することを考えたい。〈情〉の理論を視野に入れることで、我々は Av-klp の原典をより正確に校訂し解釈できる。原典校訂について一例を挙げれば、第109詩節では、岩井 [2000] が提案するように、*stanamukhanyastanakhollekhaḥ sukhasthitiḥ という読みも想定できる。しかしこの文脈で喚起されている〈情〉が何であるかを考えれば、この読みが適切でないことは一目瞭然である。原典解釈についてはどうか。第106詩節の sthagitasyandanah という語に対する「馬車を停めた者」(shing rta ni bzung nas) という Tib. の解釈は、喚起されている〈情〉の〈感情表現〉を踏まえれば、誤りであることがわかる。Av-klp の物語の原典校訂と翻訳研究は写本やチベット訳、仏教聖典文献の並行資料にもとづいてなされねばならない。しかしこれらから復元される読みや推定される意味が妥当であるか否かの検討を文法学や詩論、実際の言語運用の観点から行わず、読者に委ねる研究手法は、今日の学術水準に照らして、許容されるものではない。こうして復元された校訂原典やそれにもとづく翻訳研究は信頼性を欠くものである。Av-klp を始めとする仏教美文作品の原典校訂と翻訳研究は、美文作品の用例や詩論を踏まえた上で、文献資料と理論の両面からなされる必要があるだろう。

付論1 女と琵琶の比喩表現について

女を琵琶に喩える比喩表現の用例は九世紀カシミールの宮廷詩人 Ratnākara の美文叙事詩 *Haravi-jaya* 第一章第19詩節に見られる。これと同様の比喩表現を Kṣemendra が *Avadānakalpalatā* (Av-klp) 第59章第130詩節で用いていることは山崎 [2012: 61–63] で指摘した。問題の二詩節では、不変化詞 *iva* を用いた〈直喩〉(upamā) で女が琵琶に喩えられている。これに対し〈隠喩〉(rūpaka) で女が琵琶に喩えられている用例を我々は Av-klp 第31章 *Kalyāṇakārin* 第30詩節に見ることができる。同章については引田・大羽 [2015] による和訳が詳細な解題とともに発表されている。しかし問題の詩節は詩論的観点から詳細に検討されていない。また引田・大羽 [2015] が提示する詩節の解釈とは別の解釈も考えられることが判明したので、以下に梵文原典とそれに対する和訳を付論として挙げておく。原文は次の通りである。

Av-klp 31.30: dhanyeyam^(a) nakhasampātaiḥ kvaṇantī^(b) rāgiṇī muhuḥ |
(c)yātāsyā vallakī^(d) puṇyair^(e) aṅkārohaṇayogyatām ||

[30] この者が手にする琵琶はこの私(牛飼いの妻)に他ならない。琵琶は^{(a)(d)} 爪で気持ちよく弾かれて音を出し、繰り返し^(b) ラーガ音階を奏で、^{(c)(e)} 膝にのせられるにふさわしいものとなり、幸福なるこの私は^{(a)(d)} 爪で気持ちよく引っ搔かれて声を出し、繰り返し^(b) 色欲を抱き、^{(c)(e)} 膝にのせられるにふさわしいものとなるだろう。

上掲詩節では一人称として用いられる指示代名詞「私」(iyam) が「琵琶」(vallakī) に喩えられ、語 (a)–(e) が喩えられるものと喩えるものとを限定している。〈隠喩〉の構造を表に示すならば、以下の通りである。

	私 (iyam)	琵琶 (vallakī)
(a)(d)	爪で気持ちよく引っ搔かれて声を出す	爪で気持ちよく弾かれて音を出す
(b)	色欲を抱く	ラーガ音階を奏でる
(c)(e)	膝に乗せられるにふさわしいものとなる	膝に乗せられるにふさわしいものとなる

以上の〈隠喩〉について次の特徴を指摘できる。第一点目として、b 句の語 (b) rāgiṇī を除き、語 (a)(c)–(e) は、喩えられるものを限定する場合にも、喩えるものを限定する場合にも、異なる意味を表示しないことである。二点目として、詩節 a 句冒頭の dhanyā 「幸福な」という語は喩えられるものである「私」(iyam) という語だけを限定し、喩えるものである「琵琶」(vallakī) という語を

限定しないことである。喩えられるものと喩えるものとを限定する語が、異なる意味を必ずしも表示せず、異なる形に分割されて異なる意味を表示する複雑な構造をとることもないという点では、以上の〈隠喩〉における限定句の特徴は、Av-klp 第 24 章第 111 詩節に用いられた〈掛詞を用いた直喩〉におけるそれと共通していると言える。

付論 2 山崎 [2019] に対する訂正表

前号掲載の論文(山崎 [2019]) に対し、訂正を要する箇所があることが後日判明したので、以下に正誤表を付す。

訂正箇所	誤	正
p. 65, l. 26	彼と同じ時代に同じ地域で活動した	彼と同じ時代に活動した

参考文献

(1) 一次文献

- Aucityavicāracarcā* “Aucityavicāracarcā.” In *Kāvyamālā: A Collection of Old and Rare Sanskrit Kāvya, Nātakas, Champūs, Bhāṇas, Prahasanas, Chandas, Alankāras &c.*, ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB, 115–160. Part I. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1886.
- Avadānakalpalatā Avadāna kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra. With Its Tibetan Version Called rTogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now First Edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal.* Ed. Sarat Chandra DĀS, Hari Mohan VIDYĀBHUṢAṆA, and Satis Chandra VIDYĀBHUṢAṆA. Bibliotheca Indica New Series Nos. 777, 826, 848, 860, 886, 1168, 1257, 1262, 1295, 1310, 1354. 2 vols. Calcutta: Baptist Mission Press, 1888–1918.
See ROTHENBERG [1990].
- Bālarāmāyaṇa The Bālarāmāyaṇa: A Drama by Rājasekhara.* Ed. Pandit Govinda Deva ŚĀSTRĪ. Benares: Medical Hall Press, 1869.
- Bhāratamañjarī The Bhāratamañjarī of Kṣemendra.* Ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍit ŚĪVADATTA and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. *Kāvyamālā* 64. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1898.
- Caṇḍakauśika* See DAS GUPTA [1962].
- Daśarūpa The Daśa-rūpa, or Hindu Canons of Dramaturgy, by Dhananjaya with the Exposition of Dhanika, the Avaloka.* Ed. Fitz-Edward HALL. Bibliotheca Indica New Series Nos. 12, 24, and 82. Calcutta: Baptist Mission Press, 1861.
- Dhvanyāloka The Dhvanyāloka of Ānandavardhanāchārya: With the Commentary of Abhinavaguptāchārya.* Ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Wāsudev Laxmaṇ Śāstrī PAṆŚĪKAR. *Kāvyamālā* 25. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1928.
- Haravijaya The Haravijaya of Rājanaka Ratnākara: With the Commentary of Rājānaka Alaka.* *Kāvyamālā* 22. Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1890.
- Mahābhārata The Mahābhārata.* Ed. Vishnu S. SUKTHANKAR and Shripad Krishna BELVALKAR. 19 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1927–1959.
- Mahāvīracarita* See GRIMAL 1989.
- Śīsupālavadhā Māghabhāṭṭa's Śīsupālavadhā: With the Commentary (Sandeha-Viśausadhi) of Vallabhadeva.* Ed. Ram Chandra KAK and Harabhāṭṭa SHĀSTRĪ. Shrinagar: Kashmir Mercantile Press, 1935.

(2) 二次文献

- BRONNER, Yigal, and Lawrence MCCREA. 2012. “To Be or Not to Be Śīsupāla: Which Version of the Key Speech in Māgha’s Great Poem Did He Really Write?” *Journal of the American Oriental Society* 132-3: 427–455.
- DAS GUPTA, Sibani, trans. and ed. 1962. *The Caṇḍa-Kauśika of Ārya Kṣemīśvara: With Introduction, Full Critical Apparatus of Manuscripts, English Translation and Indices.* Calcutta: Asiatic Society.
- DE JONG, Jan Willem. 1996. “Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā, Pallavas 7–9 and 11–41.” *Hokke bunka kenkyū* 法華文化研究 [Journal of Institute for the Comprehensive Study of Lotus Sutra] 22: 1–93.

- GRIERSON, George Abraham. 1916. "On the Sarada Alphabet." *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 1916:677-708.
- GRIMAL, François, trans. and ed. 1989. *Le Mahāvīracarita de Bhavabhūti accompagné du commentaire de Vīra-rāghava*. Publications de l'institut français d'indologie 74. Pondichéry: Institut français de Pondichéry.
- HAAS, George Christian Otto. 1912. *The Daśarūpa: A Treatise on Hindu Dramaturgy by Dhananjaya*. Columbia University Indo-Iranian Series Vol. 7. New York: Columbia University Press. Reprint: New York: AMS Press, 1965.
- HIKITA Hiromichi 引田弘道, and ŌBA Emi 大羽恵美. 2015. "Bodhisattvāvadānakalpalatā dai sanjū isshō sanjū yonshō wayaku 『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章、34章和訳 [The Japanese Translation of Bodhisattvāvadānakalpalatā, Chapters 31 and 34]." *Ningen bunka* 人間文化 [Transactions of the Institute for Cultural Studies] 30:213-240.
- IWAI Shōgo 岩井昌悟. 2000. "Kṣemendra no sakuhin chū no butsudēn no kenkyū クシェーメンドラの作品中の仏伝の研究." PhD thesis, Tōyō University.
- LIENHARD, Siegfried. 1980-1981. "On the Textual Structure of Kāvya." *The Adyar Library Bulletin* 44/45:161-178.
- ROTHENBERG, Bonnie Lynne. 1990. "Kṣemendra's 'Bodhisattvāvadānakalpalatā': A Text-Critical Edition and Translation of Chapters One to Five." PhD thesis, University of Wisconsin.
- RAGHAVAN, Venkatarama. 1942. *Studies on Some Concepts of the Alaṅkāra Śāstra*. Adyar Library Series Vol. 33. Madras: Adyar Library and Research Centre.
- SATHAYE, Adheesh. 2010. "The Production of Unpleasurable Rasas in the Sanskrit Dramas of Ārya Kṣemīśvara." *Journal of the American Oriental Society* 130-3: 361-384.
- YAMASAKI Kazuho 山崎一穂. 2012. "Chūsei indo no bukkyō setsuwa: Avadānakalpalatā oyobi Aśokāvadānamālā shoshū upagupta no mārā chōbuku monogatari 中世インドの仏教説話——Avadānakalpalatā 及び Aśokāvadānamālā 所収「ウパグプタのマラー調伏物語」—— [Buddhist Narrative Literature of Medieval India: The Story of Upagupta's Victory over Mārā in the Avadānakalpalatā and the Aśokāvadānamālā]." *Hikaku ronrigaku kenkyū* 比較論理学研究 [The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic] 10:23-63.
- . 2016. "Gopadattajātakamālā ni okeru hiyū hyōgen ni tsuite Gopadattajātakamālā における比喩表現について [On Similes in Gopadatta's Jātakamālā]." *Tōyōgaku kenkyū* 東洋学研究 [Oriental Studies] 53:362-376.
- . 2017. "Kṣemendra hon daichi no fuse monogatari wayaku kenkyū クシェーメンドラ本「大地の布施物語」和訳研究 [A Japanese Translation of Kṣemendra's Version of the Pṛthivīpradāna]." *Tōyōgaku kenkyū* 東洋学研究 [Oriental Studies] 54:377-388.
- . 2019. "Avadānakalpalatā dai gojū kyū shō kenkyū nōto Avadānakalpalatā 第59章研究ノート [Notes on the Fifty-Ninth Chapter of the Avadānakalpalatā]." *Hikaku ronrigaku kenkyū* 比較論理学研究 [The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic] 16:59-83.
- . forthcoming. "Ornaments of Speech in Kṣemendra's Avadānakalpalatā." *Tōhō* 東方 [Eastern Studies] 35.

(やまさき かずほ、公益財団法人中村元東方研究所専任研究員 [インド哲学])

On Sentiments in the *Avadānakalpalatā*

YAMASAKI Kazuho

The *Avadānakalpalatā*, a collection of Buddhist legends in 108 chapters, was written by the Kashmiri poet Kṣemendra (ca. 990–1066 CE). In addition to this work, the poet wrote two treatises on poetics: the *Kavikaṅṭhābharāṇa* and the *Aucityavicāracarcā*. The former, comprised of fifty-five verses, illustrates the prerequisites for being a poet; the latter, which consists of thirty-three verses, as well as a prose autocommentary, illustrates how a poet should observe *aucitya* (“poetic propriety”) concerning the twenty-seven components of poetry. Furthermore, three verses from the *Avadānakalpalatā* are quoted in the *Aucityavicāracarcā* to illustrate the propriety of sentiment (*rasa*), truth (*tattva*), and names (*nāman*). The *Aucityavicāracarcā* and its commentary are brought to attention of scholars preparing a critical edition of the *Avadānakalpalatā*, for Kṣemendra gives brief explanations of these verses. No attempt is, however, made to consider the verses in question in the light of poetic theory advanced in the treatise. This paper aims to answer the question of how a particular sentiment is suggested by Kṣemendra, focusing on verses 105–112 of the twenty-fourth chapter of the *Avadānakalpalatā*, devoted to the depiction of a cremation ground. A closer examination of the text reveals the following:

- In the *Aucityavicāracarcā*, Kṣemendra allows poets to use a mixture of sentiments on the condition that a subordinate (*aṅga*) sentiment should not be more fully developed than a predominant (*aṅgin*) sentiment.
- In verse 111, which is quoted in the *Aucityavicāracarcā* as an example of the propriety of sentiment, Kṣemendra, using a simile in which a she-jackal and a corpse are compared to a woman and her lover, respectively, suggests two mutually exclusive sentiments, namely, the loathsome (*bībhatsa*) and the erotic (*śṛṅgāra*). According to the poet, the former is predominant, and the latter is subordinate, which can be recognized by the fact that the object of comparison in the simile is not explicitly expressed by the word *kāminī* (“amorous woman”).
- In verses 105–110, 112, we can find the words *udvega* (“anxiety”), *vipākapūyakūṇapāghrāṇa* (“inhaling the stench of festering corpses”), *virati* (“indifference to worldly enjoyments”), *syandana* (“perspiration”), *mūrchat* (“one who is in a swoon”), *gr̥dhra* (“vulture”), and *vāyasa* (“raven”), which points to the possibility that Kṣemendra uses a mixture of two sentiments: the loathsome and the terrifying (*bhayānaka*).
- A perusal of verse 112 reveals that Kṣemendra employs the word *bhavabībhatsakutsā* (“[Having said thus] with scorn because of disgust with the transmigratory world”), so that one can discern that the predominant sentiment is the loathsome.
- The pun Kṣemendra uses in verse 111 is not constructed in accordance with the demands of the poetic rules laid down by the critics claiming that the ornament of speech is the soul of poetry. Consideration of the structure of the pun in question convinces us that Kṣemendra held the view that a poet should consider a sentiment to be the essence of poetry.

In conclusion, (1) Kṣemendra suggests not merely a loathsome sentiment, but erotic and terrifying sentiments in *Avadānakalpalatā* 24.105–112 as well; and (2) considerable care is devoted to ensuring that a predominant sentiment is the loathsome by means of both implicit and explicit expressions.